（別添６－２）（用紙寸法は、日本工業規格Ａ列４とする。）

成　果　報　告　書

１．事業の題名

「“晴れの舞台”で働く体験から学び、「社会生活力」を身につける
障害学習プログラムを地域連携により拡大促進し、
社会参画へとつなげていく実践研究」

２．委託事業の実施期間

令和　３年　６月　９日から令和　３年　３月　１０日まで

３．任意で実施する取組（実施する場合のみ、○を記入）

ブロック別コンファレンス　□　→実施する場合のみ、○を記入すること

４．委託先組織の構成

（下記①②に必要事項を記載するほか、団体等の組織図など、組織体制の全体像が分かる資料を別途添付すること。）

①組織の主要構成員（役員等）

氏　　名	所　属　・　役　職　等	備考欄
田中　真宏	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・代表理事	
布施田　祥子	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・理事	
古市　理代	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・理事	
鈴木　順	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・理事	
岡井　敏	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・監事	

②事業推進担当者

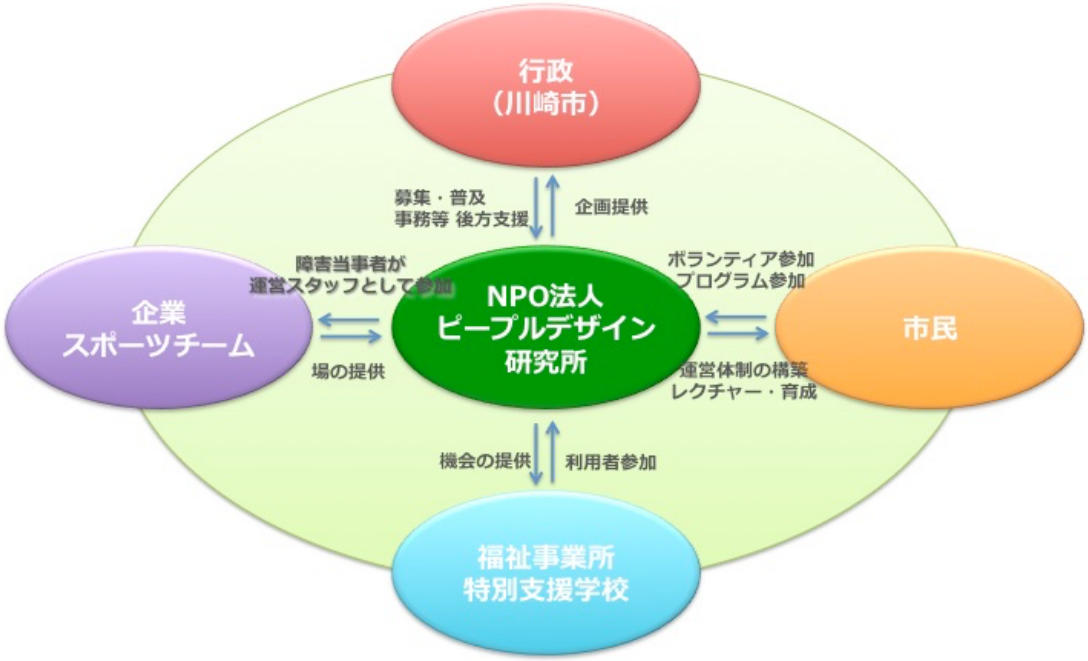
氏　　名	所　属　・　役　職　等	備考欄
田中　真宏	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・代表理事	
鈴木　順	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・理事	
金子　亜佐美	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・事務局長	
中川　可央里	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	
大津　俊一	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	
藤本　加奈	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	

田邊　宗作	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	

５．事業の実施に係る全体像

（地方公共団体と民間団体との具体的な連携内容を含め、連携先や再委託先の関係、本実践研究事業の実施に係る実施体制の全体像について図示すること。また、本事業全体を通じた目標の達成状況や、本事業終了後の目指す方向性等についても触れること。）

＜本実践研究事業の実施にかかる全体像＞



■　NPO 法人ピープルデザイン研究所

・実施期間通じて、プログラム・連携協議会・コンファレンスの企画・運営・営業・事務など全般を担った。

■　行政

・川崎市健康福祉局と、川崎市からの受託で企業への障害者就労支援を行う「企業応援センターかわさき」と連携。事前の市内事業所への声かけ、取りまとめ等の事務運営当日の現場でのサポートを行っていただいた。

■　企業・スポーツチーム

・以下、川崎市内の２社の企業（スポーツクラブ）と連携しプログラムを実施した。

株式会社 DeNA 川崎ブレイブサンダース(B リーグ 川崎ブレイブサンダース)、株式会社川崎フロンタ

ーレ（J リーグ 川崎フロンターレ）
※別途資料「プログラム実施報告書」参照

■　市内福祉事業所（移行支援、A 型、B 型）、特別支援学校、放課後ディサービス等
・市内の就労移行支援、就労移行支援 A 型、B 型、地域活動センター、就労援助センターなど、２２カ所の福祉事業所が参加した。
※別途資料「プログラム実施報告書」参照

■市民：川崎市、周辺地域市民
コーディネーター候補２名、市民ボランティアは述べ１５名参加
※別途資料「プログラム実施報告書」参照

＜本事業全体を通じた目標＞
１）障害当事者に対する目標
■「働く」という体験を通じて学び、「社会生活力」を身につける
社会の中で混ざりあい、働くという社会接続を通じて様々な経験を重ねることで、自らの新たな可能性を伸ばし、自立した豊かな人生を送るために必要な「社会生活力」をワクワク・楽しく働きながら学べるプログラムを開発。アンケートの結果から当プログラムが社会生活力を身につけることに寄与していることがわかってきた。
※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ 生活リズムの確立
アンケートの結果から、当プログラムが生活のリズムを整えることの大切さとその経験を積み、心身の健康の維持・増進に結びついていることがわかった。
※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ 「支える」立場でスポーツ・文化に関わる
期間中は、様々な理由から自らがプレイヤーとして関わることができなくても、当プログラムではスポーツや文化活動を「支える」という立場で関わることができる。スポーツや文化を働く体験を通じて身近に感じることで興味や意欲を喚起させ、その後の能動的・主体的な学びに繋がっていった。
※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■“もてなされる側” から “もてなす側”へ
働く体験を通じて、今までの（福祉）サービスを享受する立場から、サービスを提供する側に。学校教育では得られない学び・経験を得て、知識・技術を身につけ、共に働く仲間やお客様から「ありがとう」と言われることで、誰かの役に立ち喜ばれることを覚え、自信や誇りを身につける方が多かった。
※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ 働いてお金をもらう経験から、お金について学ぶ

当プログラムの参加者には、単日２時間程度の働く体験に対して労務者金（交通費相当）として 1,000 円を支給した。当初は４時間程度で 2,000 円だったが、コロナ禍においての実施で時間を短くしたために、謝金も半額の 1,000 円として実施した。しかしながらこの金額は、B 型作業所に通う障害者であれば、普段の時給の約３倍の収入となる。毎プログラム終了時に統括スタッフから手渡しでお金をもらうことで、働いてお金をもらうことを経験し、お金の大切さを知り、その使い方などについて学んだ方が多かった。

※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

２）弊研究所の目標

■ 共生社会の実現

コロナ禍での実施に向けて協議を重ね、９月からプログラムを実施。１月７日の緊急事態宣言再発令を受けて、その後は中止という判断をした。再開期間中には、川崎市以外の地域もあわせて２３企画を実施。スポーツを中心に、イベントやエンターテイメントなどを切り口に、“わける”のではなく、“混ぜて”いき、障害者の地域・社会参加の促進に挑戦した。

※ 別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照

■ 能動的に外に出て、主体的に学べる場を創出する

コロナウィルス感染拡大の影響により、企画数が減ったこと、また感染対策として規模と人数を縮小、時間を短縮した。縮小と短縮によりプログラム参加のハードルが下がり、初参加となる事業所や当事者が多くあった。また、B 型事業所の参加（知的・精神障害）が多かったが、コロナ禍で特に事業所と家との往復のみという生活を送る方が多かった中、また施設外就労や事業所のイベントやレクリエーションがなくなったなかで、当プログラムは外出して、気分転換のできる貴重な場となった。

※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ 障害者の「働く」ことに対する選択肢を増やす

当プログラムが、障害者の方々の「働く」ことに対する考えや意識をポジティブに変えるきっかけとなることが明確になってきた。

※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■コストの転換

当プログラムを通じて企業への正規就労はもちろん、アルバイトやボランティア活動、また余暇の積極的な外出などに繋げていく。障害当事者をタックステイカーからタックスペイヤーへ転換させていき、国や地域行政の社会保障費の負担削減に貢献していく。

※令和３年度の一般就労へつながった方の数字は現在川崎市が調査中。

■ プログラムがもたらす成果と、得られる学びの見える化・定量化

令和元年度から引き続き、行政や福祉事業所、特別支援学校の協力を元に、毎回参加者と参加施設職員への「社会生活力アンケート」を実施した。また、プログラムの地方地域への展開拡大に伴い、川崎市以外の地域でもアンケート調査をスタートした。川崎市ではプログラムがもたらす学びの項目が絞られてきており、それ以外の地域との違いも見えてきている。またコロナ禍における生活様式の変化により、学びに求められているものが変わってきている様子が見受けられる。次年度以降も引き続

き調査・検証を続けていく。
※ 別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■　東京大学先端技術センターの近藤先生との連携した「超短時間雇用」の実現
従来から目標にかがげていた、当プログラムの学びからステップアップが今年度実現。B リーグ川崎ブレイブサンダース において、当プログラムの参加者から超短時間雇用（※）として１名、チームへの雇用がきまった。
※超短時間雇用・・・基本的に週 30 時間以上の労働が求められる従来型の障がい者雇用にあてはまらない精神障害や発達障害、難病などを理由に長時間の労働が難しい方々を主な対象とし、週あたり数時間程度のごく短い時間から働けるようにするスキーム

＜本事業終了後の目指す方向性等の展望＞
■ 令和４年度
・コロナ禍におけるプログラム実施により、新たに見えてくる学びの効果を検証
・特別支援学校・親の会・PTA と連携し、親子の参加を再検討
地域の特別支援学校、親の会や PTA などと連携し、親子で参加できる新規プログラムをテスト実施。参加者には同様にアンケートを実施し、小学生や中学生の当事者に与える学びや、親御さんに与える学びの可能性を探っていく。
※　令和３年度はコロナ感染拡大の影響で学校との実施が困難だったため、令和４年度で
　実施できるように、引き続き準備を行なっている

・発達障害領域で活動する団体との連携
J リーグなどで発達障害者向けの「センサリールーム」を展開している団体と当プログラムとのコラボレーション、連携を模索する。双方のメリットとネットワークを共有し、プログラムの充実と展開先の拡大を狙う。

・東京大学先端技術センターの近藤先生との連携
当プログラムから「超短時間雇用」への接続機会を増やしていき、社会参加する障害者を増やしていく。また、そこから生まれる学びや効果を、東京大学先端研とともに検証していく。

・プログラムの他地域への拡大展開
令和４年度も、コロナウィルス感染拡大の影響を踏まえながら、OODA（Observe（観察）、Orient（状況判断、方向づけ）、Decide（意思決定）、Act（行動））を短期サイクルで回しながら、プログラムの分析・検証を繰り返していく。また令和３年度に大きく進展した川崎市以外の地域での展開も拡大していく。プログラムとガイドライン・マニュアルをアップデートしながら、コロナ禍であってもどこの地域でもクオリティを担保して展開できるようモデル化していく。

・他地域でプログラムを実施しながら、コーディネーター研修をスタート
コロナウィルス感染拡大のある程度の収束を想定しつつ、他地域にコーディネーターが出向き、プロ

グラムの実施や、研修を行なっていく。情報集約しながら、地域特性に合わせた最適な展開方法について模索していく。

■ 令和５年度
・特別支援学校・親の会・PTA と連携し、親子の参加を拡大
・J リーグ、B リーグなどを通じて、他地域への拡大
・発達障害領域で活動する団体との連携により、他地域への展開を拡大
・他地域でプログラムを実施しながら、コーディネーター研修をスタート
・コンソーシアム化の準備
全国の当プログラムに携わる団体と連携し、年３回の連携協議会を開催。他地域拡大とともに参画社／者を徐々に増やしながら、プログラムのクオリティを担保し、課題や成果を共有するためのコンソーシアムを形成していく。

■ 令和６年度以降
・各地域のコーディネーターを中心に運営主体を移し、日本全国各地でのプログラムの実施を常態化させていく。

６．事業の実施結果

（１）効果的な学習プログラムの実施

①実施の経過（具体的な内容は６．（１）②に記載すること。）

４月	対象期間外 ４企画実施（J リーグ（サッカー）、B リーグ（バスケットボール）） ※最小開催人数に満たないため５企画中止
５月	対象期間外 ６企画実施（J リーグ（サッカー）、B リーグ（バスケットボール）） ※最小開催人数に満たないため１企画中止
６月	１企画実施（B リーグ（バスケットボール）） ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため３企画中止
７月	1 企画実施（川崎市就労体験教育モデル事業） ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため１企画中止
８月	※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため２企画中止
９月	※緊急事態宣言発令のため３企画中止
１０月	６企画実施（J リーグ（サッカー）、B リーグ（バスケットボール、川崎市就労体験教育モデル） ※イベント中止、最小開催人数に満たないため２企画中止

１１月	８企画実施（Ｊリーグ（サッカー）、Ｂリーグ（バスケットボール））
１２月	５企画実施（Ｊリーグ（サッカー）、Ｂリーグ（バスケットボール）） ※最小開催人数に満たないため１企画中止
１月	１企画実施（Ｂリーグ（バスケットボール）） ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため７企画中止
２月	※コロナウイルス感染拡大の影響のため３企画中止 ※川崎市と協議し、3 月 20 日までの就労体験中止を判断
３月	※コロナウイルス感染拡大の影響のため企５画中止 ※川崎市と協議し、3 月 20 日までの就労体験中止を判断

②具体的な内容

（効果的な学習プログラムに係る取組内容を具体的に記載すること。学習講座や活動等を開催した場合、実施スケジュールや内容、多様な者との交流や共同学習など共生社会の実現に向けた取組、障害者本人の意見の反映や自主的な活動の促進、外部講師招聘及びボランティアスタッフ活用の有無、参加対象者のターゲット（障害種・属性・活動規模等を含む。）等を記載すること。また、結果として、効果的な学習プログラムを提示し、根拠とともに記載すること。なお、実施結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

＜学習プログラム「就労体験プログラム」の内容＞

川崎市内において、行政・企業・団体・スポーツチーム・福祉事業所などと連携し、そのリソースを活用して、ＪリーグやＢリーグを始めとするプロスポーツのホームゲームやイベント、映画・音楽・ハロウィンパレードなどの文化イベントなどにおいて、全体のスタッフ人数の約 7%相当(日本の総人口に対する障害者の割合)を目安とし、障害者と健常者の方々が一緒に混ざり合って働き、働くという社会との接続体験を通じて学び、自立に向けた社会的生活力を身につける学びの場を提供した。

また川崎市内でのプログラムをモデルに、他地域にてテスト展開を行った。

＜ 実施スケジュールや内容 ＞

実施企画数　：２０企画

※緊急事態宣言、まん延防止等措置発令により２７企画を中止とした

参加者数　　：６３名（延べ人数）

参加事業所数：総計２２事業所

参加企業　　：３社

参加見学者　：１５名

ボランティア：１５名

※他地域での実施概要

実施企画数　：　３８企画

参加者数　　：３３６名（延べ人数）

実施自治体数：川崎市以外で９箇所
※東京都渋谷区
※東京都港区
※東京都世田谷区
※東京都品川区
※新潟県新潟市
※静岡県藤枝市
※宮城県仙台市
※京都府亀岡市
※岩手県陸前高田市

参加事業所数：総計２２事業所
参加企業・団体数：１３社
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照

＜多様な者との交流や共同学習など共生社会の実現に向けた取組＞
当プログラムは１企画ごとに市内の全事業所等に案内し応募を募っている。今年度の引き続きのコロナ禍の実施においては、感染対策の観点から１企画につき参加者は運営スタッフ含めて１０名までとした。また基礎疾患を持つ方も多く参加するため、不特定多数と接することがないように、一般の方々とは接しない時間帯に実施時間をずらして行なった。よって、当初想定していた多くの一般の方々と触れ合う機会をつくることができなかった。しかしながら、受け入れ先のスタッフの方々や、普段一緒になることのない他事業所の支援員様、利用者様と接することが、参加者のモチベーションを生む、良い影響を与えている。
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照

＜障害者当事者の意見の反映や自主的な活動の促進＞
・毎回参加者に向けてアンケートを実施し、参加する障害当事者（利用者様）と同行した支援員様）の両方から、感想や意見を含めて回収した。
・このアンケートは途中、連携協議会等でも共有・検証しながら、企画の運営などの改善の参考とし、どの様な学びの機会と成果が生まれているかを検証・確認した。
・市と連携し施設職員からの声も拾いながら、一般企業への就労者数だけでなく、アルバイトやＢ型事業所からＡ型事業所への移行、外出機会の増加など、スモールステップアップも確認し定量化。（調査は年度区切りになるため現在調査中）
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照
※別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

＜外部講師招聘及びボランティアスタッフ活用の有無＞
・弊研究内にはこれまでの実績に基づく、運営ノウハウやネットワークなどのベースがすでに存在しているため、経費削減の視点からも新たに外部講師の招聘などは行っていない。
・ボランティアスタッフは学生から社会人まで、述べ 15 名の方にご参加いただいた。今年度は高校も参加し、以下の声をいただいた。

障害者の方と話す時はいつも気を遣ってお話をしていたが、どんな方が相手でも自分も自然体で話すことが相手の方の緊張もほぐし円滑な会話に繋がるのだと気付き、接し方の考えが変わった。（10 代／学生の方）
普段あまり関わらない方との交流で、今まで自分が抱いていた偏見や、狭い世界で生きていたことに気がついた。地域引きこもりセンターの方々との交流で"引きこもり"の方のイメージが変わった。皆さん優しい方ばかりだった。（10 代／学生の方）
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」、令和４年１月実施の川崎ブレイブサンダース 参照

＜参加対象者のターゲット（障害種・属性・活動規模等を含む）＞
■参加者障害属性
　身体、発達、知的、精神、ひきこもり他（障害重複あり）
■年齢属性
・10 代から 60 代までと、参加者の年齢層は幅広い
・20 代から 50 代までが全体の 9 割以上を占める
※各割合の詳細は別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ プログラム企画から実施までの流れ
１）企業・団体・スポーツチームへ協力を依頼
２）弊研究所のスタッフが実際に体験・見学をし、仕事の切り出しを行う
３）企業や川崎市健康福祉局と連絡・調整し、実際に担う仕事を決定
４）川崎市健康福祉局と連携し、市内の事業所や施設に声をかけ、参加者を募り、コーディネート
５）実施まで、企業・団体・スポーツチーム担当者と連絡・調整
６）１企画につき最低２名のスタッフ（ボランティアスタッフ含む）を責任者として派遣しプログラムを実施

■ 効果的な学習プログラムとなった根拠
社会生活力学習度アンケート調査・検証の結果、参加者や支援者の感想や意見を踏まえると、現状実施しているプログラムは、障害当事者が自立や社会参画していくにあたり、それらに必要なことを学べるプログラムになっているといえる。
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照
※別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

以下、社会生活力に基づく、調査の結果学びの成果が見えた項目である。
■生活の基礎をつくる
・健康管理
・食生活
・セルフケア
・時間管理
・安全・危機管理

■自分の生活をつくる
・衣類管理
■自分らしく生きる
・自分と障害の理解
・コミュニケーション
■社会参加する
・外出、余暇、社会活動
・社会参加
※別途資料：3.「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

■ 検討すべき点や課題点
・コロナ禍で実施・運営体制が大きく変わり、プログラムの運営の細かい部分についての指摘もあったので、次年度の運営改善につなげていく。
・実施機会を増やしてほしい、実施時間を伸ばして欲しい、という声がプログラム参加者から多くあるので、コロナ禍でも安全・安心で運営できる体制を構築していきたい。
・昨年度の報告書でご提出した、コロナ感染対策ガイドラインを、今年度も引き続き活用し、それに沿って運営を進めた。結果、感染やその他事故やトラブルも起きずに実施することができた。また、このガイドラインは他地域にも共有し、他地域での実施の際にもこれに沿った運営を行っているが、拡大展開していくことでリスクも高まるため、その管理には留意して進行していきたい。
・他地域からの実施希望の声が多いが、人・資金のリソースが少ない。クラウドファンディングの実施や協賛社を募りながら、要望に応えられる体制を構築していけるかが課題

（２）連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築

①連携協議会の構成員

氏　　名	所　属　・　役　職　等	備考欄
山田　征子	川崎市障害保健福祉部 障害者社会参加・就労支援課　雇用就労推進担当係長	
小坂　哲郎	川崎市障害保健福祉部 障害者社会参加・就労支援課　雇用就労推進担当	
中野　良子	川崎市障害保健福祉部 障害者社会参加・就労支援課　雇用就労推進担当	
森田 泰仁	特定非営利活動法人日本セルプセンター事務局	
原　洋介	株式会社 LITALICO LITALICO ワークス千葉	
鈴木　順	公益社団法人日本サッカー協会（Ｊリーグ）	

	社会連携室　室長	
三浦 拓真	株式会社川崎フロンターレ 事業推進部 プロモーショングループ	
葛谷 将司	株式会社 DeNA 川崎ブレイブサンダース アリーナオペレーション部 運営担当	
荒木 伸義	社会福祉法人 県央福祉会 企業応援センターかわさき 所長	
佐藤 さやか	社会福祉法人 県央福祉会 企業応援センターかわさき	
西村 和恭	社会福祉法人 青い鳥 川崎市南部就労援助センター	
小松 有美	社会福祉法人川崎聖風福祉会 社会復帰訓練所就労移行支援事業所 あやめ 職業指導員	
野辺　季暢	社会福祉法人県央福祉会 百合丘就労援助センター	
村田 勝	社会福祉法人電機神奈川福祉センター	
仲里　幸剛	株式会社 LITALICO LITALICO ワークス川崎	
渡邊　雅弘	新潟市社会福祉協議会 地域福祉課　地域活動支援課　副主査	
山田　毅	NPO 法人スロコミ／プラスクロス	
大塚　建彦	京都府亀岡市議会議員	
鈴木　裕利	J リーグ 藤枝 MYFC	

②連携協議会事務局構成員（４．②の担当者の兼務可。また、事務作業スタッフを除く。）

氏　　名	所　属　・　役　職　等	備考欄
田中　真宏	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・代表理事	
金子　亜佐美	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・事務局長	
中川　可央里	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築の実施経過（具体的な内容は６．（２）④に記載すること。）

４月	
５月	
６月	
７月	7/1 第１回連携協議会の開催

	オンラインで開催。令和３年度の実施実績、調査研究結果を共有。コロナ禍における受け入れ先や事業所の最新情報の共有、再開に向けての進捗共有などを行なった。宮城県仙台市と新潟県新潟市からも初参加。
８月	
９月	
１０月	
１１月	
１２月	12/1　第２回連携協議会の開催 オンラインで開催。ガイドラインマニュアルの公開・共有と、コロナ禍における実施内容、安全・管理の観点からの対策などを共有した。仙台と新潟の事例も参考に、課題や成果を共有。
１月	
２月	2/16　第３回連携協議会の開催 オンラインで開催。１月までの開催実績、アンケートや「社会生活力学習度」アンケート調査結果を発表。コロナ禍の実施についてや、次年度に向けた取り組みについて確認。静岡県藤枝市、京都府亀岡市も参加。
３月	

④具体的な研究内容

（連携協議会における議論内容、検討結果等を記載するとともに、「どのような者と連携すると効果的な実施体制・連携体制が構築できるか」等に関する分析・検証を行い、具体的な実施体制・連携体制等のモデルを提示すること。その際、自立や社会参加・就労等に関わる具体的なデータ・調査結果・事例等のエビデンスに基づく事業成果の分析・検証結果もあわせて記載すること。なお、実施結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

※以下、別途資料：8.「連携協議会議事録」参照

＜開催概要＞
日時：令和３年７月１日（木）　14：00~15：30
場所：オンライン（zoom）
出席者：13 名
（J リーグ 川崎フロンターレ 三浦様、B リーグ 川崎ブレイブサンダース 葛谷様、
企業応援センターかわさき 荒木様、佐藤様、
川崎市 障害保健福祉部障害者社会参加・就労支援課 山田様、中野様、
就労移行支援事業所あやめ 小松様、川崎南部就労援助センター 甘利様、
中部就労援助センター 安西様、百合丘就労移行支援センター 野辺様、
日本セルプセンター 森田様、新潟市社会福祉協議会 渡邊様、
ピープルデザイン研究所 田中　※順不同）

■第２回

＜開催概要＞
日時：令和３年 12 月１日（水）　10：00~11：30
場所：オンライン（zoom）
出席者：13 名
（Ｊリーグ 鈴木様、Ｊリーグ 川崎フロンターレ 三浦様、企業応援センターかわさき 荒木様、川崎市 障害者保健福祉部障害者社会参加・就労支援課 小坂様、山田様、中野様、南部就労援助センター 甘利様、百合丘就労移行支援センター 野辺様、日本セルプセンター 森田様、新潟市社会福祉協議会 渡邊様、NPO 法人スロコミ 山田様、ピープルデザイン研究所 田中　※順不同）

■第３回
＜開催概要＞
日時：令和４年２月 16 日（水）10：00-11：30
場所：オンライン（zoom）
出席者：16 名
（Ｊリーグ 鈴木様、Ｂリーグ 川崎ブレイブサンダース 葛谷様、企業応援センターかわさき 荒木様、佐藤様、川崎市 障害保健福祉部障害者社会参加・就労支援課 中野様、中部就労援助センター 安西様、日下様、八戸部様、日本セルプセンター 森田様、新潟市社会福祉協議会 渡邊様、NPO 法人スロコミ 山田様、Ｊリーグ 藤枝 MYFC 鈴木様、京都府亀岡市議会議員 大塚様、NPO 法人ピープルデザイン研究所 田中、金子、中川　※順不同）

（３）コーディネーター・指導者等の配置やボランティアの育成・活用等の検討
①コーディネーター・指導者等（任意）

氏　　名	所　属　・　役　職　等	備考欄
田中　真宏	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・代表理事	
金子　亜佐美	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・事務局長	
中川　可央里	特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所・運営委員	

②実施経過（具体的な内容は６．（３）③に記載すること。）

４月	対象期間外 ４企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 ※最小開催人数に満たないため５企画中止
５月	対象期間外 ６企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 ※最小開催人数に満たないため１企画中止
６月	１企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため３企画中止

	宮城県仙台市に訪問し、現地実施時に実施団体へのアドバイスやレクチャーを実施
７月	１企画実施後、振り返りミーティングを実施 ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント延期のため１企画中止 新潟県新潟市に訪問し、現地実施時に実施団体へのアドバイスやレクチャーを実施
８月	※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため２企画中止
９月	※緊急事態宣言発令のため３企画中止
１０月	６企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 ※最小開催人数に満たないため２企画中止 静岡県藤枝市、京都府亀岡市に訪問し、現地実施時に実施団体へのアドバイスやレクチャーを実施
１１月	７企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 北海道札幌市に訪問し、実施に向けての現調や関係各社との MTG を実施
１２月	５企画実施後、各回振り返りミーティングを実施 宮城県仙台市に訪問し、実施に向けての現調や関係各社との MTG を実施 あわせてプログラムも実施 ※最小開催人数に満たないため１企画中止
１月	１企画実施後、振り返りミーティングを実施 ※コロナウイルス感染拡大の影響によるイベント中止のため７企画中止 宮城県陸前高田市に訪問し、現地実施時に実施団体へのアドバイスやレクチャーを実施
２月	※コロナウイルス感染拡大の影響のため３企画中止
３月	※コロナウイルス感染拡大の影響のため５企画中止

③具体的な内容

（コーディネーター・指導者等の配置やボランティアの育成・活用等に係る検討結果等を記載すること。また、「どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者等の役割に適しているか」、「具体的にどのように配置・活動すべきか」等に関する見解もあわせて記載すること。なお、検討結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

＜開発を目指すコーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策の内容＞
・コーディネーターが事前、当日、事後で、指導やフォローを行いプログラムを運営・進行。
・地方展開の際にも、事前にオン・オフライン通じてレクチャーを行い、当日は現地に出向けるタイミングでアドバイスやレクチャーを行った。
・コーディネーターは今年度３名になり、現在も育成している。地方地域含めて来年度も増やしていきたい。

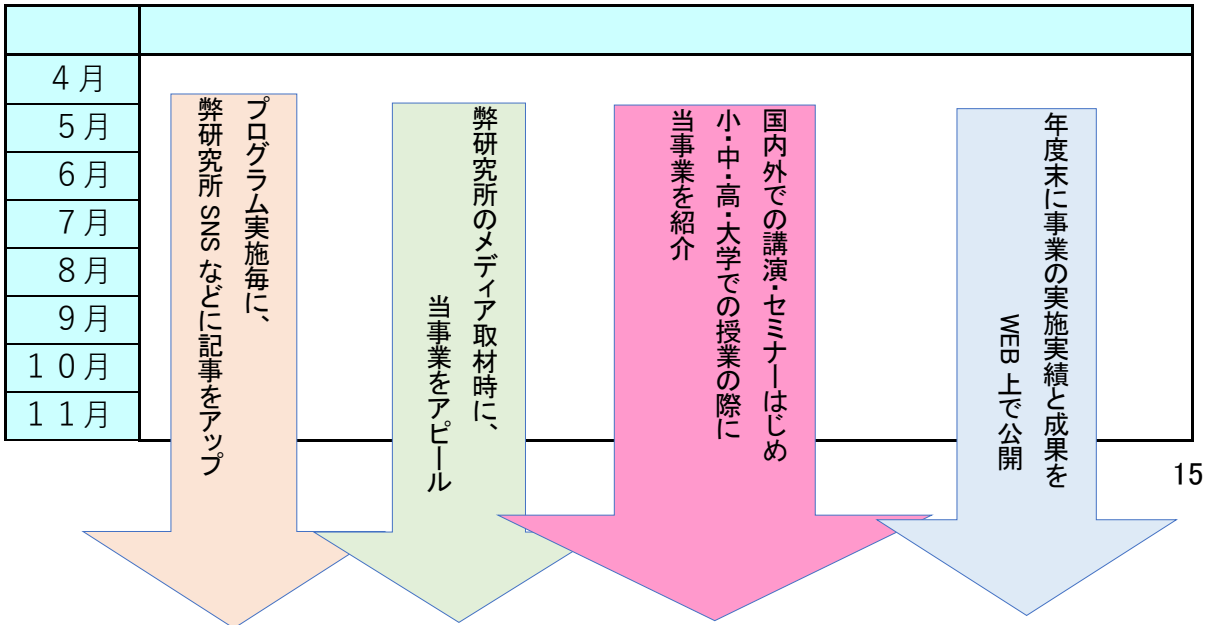
＜コーディネーター・指導者の適性や人材配置・活用のモデル＞
・全国展開を見据え汎用性を前提にしたモデル化を進めるにあたり、資格や専門性を有するものでな

くても、参加者の学びのクオリティを担保しながら、当プログラムを運営・コーディネートできるように事前や事後でレクチャーや振り返りミーティングを行った。
・いつ、どこで、誰が行っても、当プログラムが有益な学びと経験の場になるよう、朝礼や仕事中、終礼などでの細かい部分での声かけやフォロー、運営の大枠をマニュアル化した。

＜どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者の役割に適しているか＞
・企業にお勤めの方
　―週末の余暇を活用した社会貢献活動や、ボランティア活動、障害者雇用、SDGs などに興味をお持ちの方
・スポーツクラブのホームタウン活動等の担当者
　―近年各スポーツリーグ、クラブ、チームでもダイバーシティや SDGs の機運が高まっているため、このような機会を通じて当事者との取り組みのノウハウを得られることが重宝されている
・福祉事業所
　―地域の福祉事業所がアライアンスなどを組み、持ち回りで担当する
・障害当事者
　―弊研究所では、精神障害者の方をコーディネーターに育成した。当事者がプログラム運営に携わることにより、当事者目線で細かいコミュニケーションやフォローなどを行い、運営のクオリティを上げることができている。またその方自身にとっても大きなステップアップと、学びの場にもなっている。今後も参加者の中から、運営側に回れるような当事者を増やす機会をつくっていきたい。（現在は LGBTQ の当事者の方も育成中）

＜ 開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等 ＞
・運営マニュアルのアップデート
・他地域での課題や成果の共有、細かいフォロー体制の事例集の作成
・プログラムを拡大展開していくにあたって広がっているリスクや安全管理に対してのマニュアル化
・非常時（地震・火災他事故やトラブル）時の連絡体制・連携体制
・コロナ感染対策や合理的配慮

（４）成果等の普及
①実施経過（具体的な内容は６．（４）②に記載すること。）



１２月	
１月	
２月	
３月	

②具体的な内容

（成果等の普及に係る取組内容を具体的に記載すること。成果報告会等のフォーラム等を開催した場合、実施スケジュールや内容、参加者の属性（地方公共団体・関係団体・一般等）等を記載すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

＜成果等の普及に係る取組内容を具体的に記載＞

※別途添付：4.「成果報告会 「超福祉の学校@SHIBUYA 202」実施報告書」参照

１） 成果報告会の実施

2021 年 9 月に文部科学省と共催で、「超福祉の学校@SHIBUYA ～障害の有無を飛び超えて、つながる学び舎～」をオンライン配信にて開催。その中で「スポーツの舞台で障害者が働く、インクルーシブスタジアムの実現」と題し、成果報告会を行った。約５００名の方にご視聴をいただいた。

日時 ：2021 年 9 月 18 日(土) 13:00-14:45

場所 ：渋谷ヒカリエ 8F 「8/、ハチ」

内容 ：ピープルデザイン研究所が川崎市と共に拡大展開している、障害者が”晴れの舞台”で働くことを通じて学び、社会参画を目指す、「就労体験プロジェクト」。Ｊリーグを通じて、各地に広がり始めたこの取組。プロジェクトにより、障害当事者や支援者、クラブや企業などに生まれた学びとは。ゲストを招いてお話しします。

登壇者：

山田 征子（ヤマダ イクコ）

川崎市健康福祉局障害者社会参加・就労支援課 雇用就労推進担当

徳田 航介（トクダ コウスケ）

株式会社藤枝ＭＹＦＣ 代表取締役

渡邊 雅弘（ワタナベ マサヒロ）

新潟市社会福祉協議会 社会福祉士/福祉教育推進員

鈴木 順（スズキ ジュン）

NPO 法人ピープルデザイン研究所 理事

＜視聴ページ＞

http://peopledesign.or.jp/school/symposium/189/

２)プログラム実施毎に弊研究所 Facebook 上で公開。

令和 2 年度の Facebook を活用した SNS での告知は、総投稿数 32、総閲覧数 約 3 万ビューとなった。

３）通年、TV・新聞・雑誌・WEB 等のメディア取材を通じて、事業をアピール。

令和３年度は、合計３７メディアに取り上げていただいた。
（内訳：新聞２紙、テレビ　２番組、ラジオ　１番組、WEB　３２サイト）
新聞：日経新聞
TV：NHK、NHK-BS
※別途資料：2.「プログラム実施報告書」参照

４）弊研究所が行う国内外の大学等での授業や、講演にて取り組みの報告
期間中は９箇所で授業・講演等を行った
以下実績：
官公庁：川崎市（職員研修）
企業　：日経新聞、日経 BP、
団体等：一般社団法人 sports X
学校　：目白大学メディア学部、日本工学院、富士大学、神戸市立湊翔楠中学校、千葉商科大学、愛知県豊橋市社会福祉協議会
イベント等：超福祉の学校（文部科学省主催イベント）、神奈川県共生社会フォーラム

５)年度末までの実績値とともに、これらの成果報告を WEB 上にアップ
川崎市との共同で行っているため、区切りが年度となり、実績をまとめて５月頃に掲載予定

６）成果報告書を作成し、年度終了ごとに関係各社に戸別訪問し報告
文部科学省、川崎市長・副市長、川崎市市民文化局、川崎市健康福祉、川崎フロンターレ、川崎ブレイブサンダース

（５）広域的な研究成果普及・人材育成等を目的としたブロック別コンファレンスの実施
（３．において「ブロック別コンファレンス」の実施を選択した場合のみ、６．（５）①、②について記載すること。）
①実施経過（具体的な内容は６．（５）②に記載すること。）

４月	
５月	
６月	
７月	
８月	
９月	
１０月	
１１月	
１２月	

１月	
２月	
３月	

②具体的な内容

（ブロック別コンファレンスの取組内容を具体的に記載すること。実施スケジュールや内容、参加者の属性（地方公共団体・関係団体・一般等）を明確にした上で、具体的に記載すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

（Ａ）参加者の属性について

	合計（人）
属性別参加者数	
（内訳）	
行政関係者（教育委員会）	
行政関係者（首長部局）	
学校教育関係者（大学等関係者を除く）	
大学等関係者	
公民館等社会教育施設関係者	
社会福祉法人関係者	
ＮＰＯ法人関係者	
企業関係者（商工会等含む）	

保護者団体関係者（親の会・手をつなぐ育成会等含む） その他一般参加者 運営事務局関係者	

※把握している属性項目によって追加して記載すること。

（B）メディアインパクト（報道等での周知状況）

	件数
新聞	
ラジオ	
テレビ	

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

７．本実践研究事業の実施により得られた成果・効果

（自立や社会参加・就労等に関する具体的なエビデンスに基づく成果・効果、本委託事業終了後の成果の活用方針・手法等）

（１）事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット目標

※数値を用いる等して具体的に記載すること

（事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット）

※数値を用いる等して具体的に記載すること

１）　　社会生活力学習度アンケート調査・検証結果

別途資料：「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果より、以下の成果・効果が見えた。

※ 詳細は別途資料：「社会生活力学習度アンケート調査・検証結果」参照

A.　就労体験プログラムに参加した川崎市内福祉事業所 利用者様のアンケート結果

（有効回答数：80 名）

＜ プログラム参加前に気をつけたこと ＞

■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り

・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア）

・自分の生活をつくる（モジュール 8.そうじ・整理）

・社会参加する（モジュール 18.働く）

■ 事前には、早寝早起・準備・身だしなみを整えるなど「生活の基礎をつくる」「自分の生活をつくる」部分、想像して考えるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった

※ 昨年と比較するとコロナ禍が長引くことにより、実際に外出することに必要な項目に対しての意識が低くなっていることが考えられる

※ 昨年と比較すると「モジュール 16.情報」、「モジュール 18.働く」に対する関心が減っている

＜ プログラム参加当日に気をつけたこと ＞

■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り

・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 4.時間管理、モジュール 5.安全・危機管理）

・社会参加する（モジュール 18.働く）

■ 当日は、体調管理・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、楽しく働く・態度や姿勢に気をつけるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった

※ 昨年と比較すると「モジュール 8.そうじ・整理」に対する関心が減っている

＜ プログラム参加後に気をつけたこと ＞

■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り

・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理）

・自分らしく生きる（モジュール 12.コミュニケーションと人間関係）

・社会参加する（モジュール 20.社会参加）

■ 参加後は、体調・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、　　コミュニケーションなどの「自分らしく生きる」部分、社会に参加することを考える「社会参加する」部分における学びがあることがわかった

※ プログラム参加後は「自分らしく生きる」ことについての学び（気づき）が大きい
※ 昨年は「モジュール 19.余暇」、「モジュール 20.社会参加」への関心が減っている

＜普段の生活について＞
■平日は家と事業所の往復が多いという方が 6 割
■休日に出かける方は 4 割

＜ プログラムに参加して学んだこと（自由記述で 63 名の回答） ＞
■ 単純作業は集中力を生み出すことにもつながっている
また、プログラムを通して自分自身や仕事の仕方に向き合っている方が多い
■ 普段と違う環境下で、普段は接する機会がない方々と接することで、他者や社会のことを考える想像力が育まれている
■ 自分の生活に密着していること（消毒作業など）を仕事として行うことで、目の前にいない相手のことも思いやる気持ちが生まれている

＜ プログラムに参加して、自分の中で変わったこと、気づいたこと（自由記述で 56 名の回答） ＞
■ 体調管理、コミュニケーション、外に出る、働くことの大切さに気がついた方が多い
■ いつもと違うことにチャレンジすること、責任感を持って仕事に取り組むことで、自己肯定感につながっていると考えられる
■ プログラムに継続して参加することで、自分なりのコミュニケーションの取り方を模索する機会となっている
■ 「気がつく」「考える」機会となり、能動的な学びや社会参加に向けた具体的な行動に結びついていることがわかった

＜プログラムを通じて学んだことはこれからの生活や社会に出る時に役立つと思うか＞
■ そう思うという方が 9 割
■ どちらでもない・わからないという方が 1 割未満
■ プログラムに参加することで、多くの方が学びや気づきを得ている

＜ その他感想など（自由記述で 44 名からの回答） ＞
■ プログラムの内容（仕事）が大変だったが、楽しかった・また参加したいと答えた方が多い
■ 「〇〇したい」という、ポジティブなモチベーションへと繋がっていることがわかる
■ プログラムを通じて得られる非日常的な体験をして、様々な角度から社会に参加すること、人と関わることについて考える機会となっている

B. プログラムに同行した福祉事業所 支援員様のアンケート結果
（有効回答数：３８名）
＜支援者様からみて参加者がプログラム参加前に得た学び＞
■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・ 生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 4.時間管理）
・ 自分の生活をつくる（モジュール 8.そうじ・整理）

■ 事前には、早寝早起・時間管理など「生活の基礎をつくる」部分、持ち物や洋服の準備など「自分の生活をつくる」部分における学びがあることがわかった
■ 「生活の基礎をつくる」部分において、参加者アンケートとは異なる結果が見られた
※ 昨年と比較すると「モジュール 16.情報」、「モジュール 18.働く」への関心が低くなっている

＜ 支援者からみて参加者がプログラム参加当日に得た学び ＞
■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア、モジュール 4.時間管理）
・自分らしく生きる（モジュール 12.コミュニケーションと人間関係）
・社会参加する（モジュール 18.働く）
■ 当日は、体調管理・身だしなみ・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、コミュニケーションなどの「自分らしく生きる」部分、態度や姿勢に気をつけるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった
■ 多くの項目において、参加者アンケートとは異なる結果が見られた（参加者の方がポイントが高い）
※ 昨年と比較すると時間管理に関して差がみられる
※ 参加者アンケートと比較すると支援者様は「プログラムに真剣に取り組んでいる」という印象を持たれていることが推測できる
※ 昨年と比較すると「モジュール 4.時間管理」、「モジュール 8. そうじ・整理」への関心が低くなっている

＜ 支援者からみて参加者がプログラム参加後に得た学び ＞
■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理）
・自分らしく生きる（モジュール 12.コミュニケーションと人間関係）
・社会参加する（モジュール 20.社会参加）
■ 参加後は、体調管理などの「生活の基礎をつくる」部分、 コミュニケーションなどの「自分らしく生きる」の部分、社会に参加することなどの「社会参加する」部分における学びがあることがわかった
■ 多くの項目において、参加者アンケートと異なる結果が見られた
※ 昨年と比較すると全ての支援者様の結果において「3.セルフケア」がポイントアップしていることから「他者からどう見られるか」についての意識が高くなったと考えられる

＜プログラム終了後に利用者様と振り返りの場や、感想や想いを共有する場を設けているか＞
■ 毎回設けている方が 7 割
■ 利用者様に合わせて、様々な形で感想や想いを共有していることがわかった

＜ プログラムに参加して利用者様が学んだこと（38 名の自由記述の回答から検証） ＞
■ 社会に出ること、働くこと、チームワーク、協調性、コミュニケーションに関する学びがあった
■ 普段接しない人と関わることが刺激になり、利用者様の新しい強みの発見や、能力の向上につな

がっている

■ プログラム中に与えられた目標をやり遂げることで「達成感」を得ることができ、それが利用者様の自信や満足度につながっている

■ 支援者様から見ても、働くという経験を通じて多くの人と関わるこのプログラムが、様々な学びを生んでいることがわかる

＜プログラムを通じて利用者様が学んだことはこれからの生活に役立つと思うか＞

■ そう思うという方が１０割

■プログラムに参加することが多くの利用者様の学びや気づきにつながっている

＜ その他、感想等（29 名の自由回答の記述から検証） ＞

■ 当プログラムへの評価や期待が高い

■ 支援者様側からはアセスメントの場として有用な機会であることがわかる

■ プログラム終了後、事業所でも利用者様と感想や想いを共有できるきっかけになっている

■ コロナ禍が長引き、運営体制を模索する中で、プログラム運営の細かい部分についてのご提案を多くいただき、支援員様とともに 次年度の更なるプログラム内容の向上につなげていく

C. 就労体験プログラムに参加した川崎市以外の福祉事業所 利用者様のアンケート結果

（有効回答数：112 名）

＜ プログラム参加前に気をつけたこと ＞

■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り

・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 2.食生活、モジュール 3.セルフケア）

・自分の生活をつくる（モジュール 8.そうじ・整理、モジュール 10.衣類管理）

■ 事前には、早寝早起・準備・身だしなみを整えるなど「生活の基礎をつくる」部分、持ち物や洋服などの準備など「自分の生活をつくる」部分における学びがあることがわかった

※ 事前準備に関する項目のポイントが高い

※ 川崎市と比較すると「モジュール 8.そうじ・整理」への関心が高く、「モジュール 17.外出」への関心が低くなっている

＜ プログラム参加当日に気をつけたこと ＞

■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り

・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア、モジュール 4.時間管理）

・社会参加する（モジュール 18.働く）

■ 当日は、体調管理・身だしなみ・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、楽しく働く・態度や姿勢に気をつけるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった

※ 「生活の基礎をつくる」部分においての意識がとても高い

※ 川崎市と比較すると「モジュール 4.時間管理」、「モジュール 6.金銭管理」への関心が低くなっている

＜ プログラム参加後に気をつけたこと ＞

■ 約４割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア）
・自分らしく生きる（モジュール 12.コミュニケーションと人間関係）
■ 参加後は、体調管理・身だしなみなどの「生活の基礎をつくる」部分、 コミュニケーションなどの「自分の生活をつくる」部分における学びがあることがわかった
※ 参加前と比較すると生活や外出に関係する学びがあったことがわかる
※ 「社会参加する」部分において川崎市のほうが関心が高いのは、参加回数を重ねることによって得られる学びだと考えられる
※ 川崎市と比較すると「モジュール 3.セルフケア」への関心が高く、「モジュール 20.社会参加」への関心が低くなっている

＜普段の生活について＞
■ 平日は家と事業所の往復が多い方が約６割
■ 休日は外に出かける方も６割いることから仕事と余暇のバランスがとれている方も多いと考えられる
※ 川崎市と比較すると休日に外出する方が２割↑

＜プログラムの満足度＞
■ 満足という方が８割、ふつうという方が２割
■ プログラムへの満足度が高い
■ ふつうと回答した方の中には、自己反省をしている、慣れない環境に疲れを感じた方もいる
■ イベントの運営する立場と参加する立場が同時に体験できること、プログラムに参加しながら対価を得られること、社会の役に立つこと、自分の力を発揮できたことに対する満足度が高い

＜ プログラムに参加して学んだこと（自由記述で 62 名の回答） ＞
■ 挨拶や “ありがとう”などのコミュニケーション、チームワーク、協調性を学んだという声が大半をしめた
■ 社会や仕事に対するポジティブな印象の変化や、仕事の選択肢が増えたと感じる方が多い
■ 他者や社会を意識することで自己理解が深まっている
■ 普段と違う環境下で、普段は接する機会がない方々と接することが、これらの学びを生み出している

＜ プログラムに参加して、自分の中で変わったこと、気づいたこと（自由記述で 56 名の回答） ＞
■ 体調管理、コミュニケーション、外に出る、働くことの大切さに気がついた方が多い
■ いつもと違うことにチャレンジすることで、得意不得意を考える機会、選択肢を広げる機会になっている
■ 集団の中で行動することで、自分のポジション（役割）を考える機会にもなっている
■ 「気がつく」「考える」機会となり、能動的な学びや社会参加に向けた具体的な行動に結びついていることがわかった

＜プログラムを通じて学んだことはこれからの生活や社会に出る時に役立つと思うか＞

■ そう思うという方が８割
■ どちらでもない・あまり思わない・わからないという方が２割
※ 川崎市と比較するとそう思う方が１割↓

＜ その他感想など（自由記述で 44 名からの回答） ＞
■ プログラムの内容（仕事）が大変だったが、楽しかったと答えた方が多い
■ 社会や地域と関わることの大切さを人とのコミュニケーションを通じて学んだ方が多い
■「楽しかった」「また参加したい」という声が多く、“晴れの舞台”で働く経験が社会参加の意欲へつながることがわかる

D. プログラムに同行した川崎市以外の福祉事業所 職員様のアンケート結果
（有効回答数：40 名）

＜支援者様からみて参加者がプログラム参加前に得た学び＞
■ 約４割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 2.食生活、モジュール 3.セルフケア、モジュール 4.時間管理、モジュール 5.安全・危機管理）
・自分の生活をつくる（モジュール 8.そうじ・整理、10.衣類管理）
・社会参加する（モジュール 16.情報）
■ 事前には、体調・時間管理・身だしなみを整える・不安なことを相談するなど「生活の基礎をつくる」部分、持ち物や洋服などの準備など「自分の生活をつくる」部分、 情報を調べるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった
■ 「生活の基礎をつくる」「社会参加する」部分において、参加者アンケートとは異なる結果が見られた
※ 川崎市と比較すると事前準備に関する項目のポイントが高い反面、「モジュール 18.働く」のポイントが低いことは、地方では当プログラムに初めて参加される方が多いことが影響していると考えられる
※ 参加者アンケートと比較すると「モジュール 5」のポイントが高いことから支援者様が積極的にコミュニケーションをとっていることが考えられる
※ 川崎市と比較すると「モジュール 2.食生活」、「モジュール 16.情報」への関心が高くなっている

＜ 支援者からみて参加者がプログラム参加当日に得た学び ＞
■ 約４割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア、モジュール 4.時間管理）
・自分らしく生きる（モジュール 11.自分と障害の理解、12.コミュニケーションと人間関係）
・社会参加する（モジュール 18.働く）
■ 当日は、体調管理・身だしなみ・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、自信を持つ・コミュニケーションなどの「自分らしく生きる」部分、楽しく働く・態度や姿勢に気をつけるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった
■ 「生活の基礎をつくる」部分において、参加者アンケートとは異なる結果が見られた

※ 参加者アンケートと比較すると支援者様は「社会性を意識して参加している」という印象を持たれていることが考えられる
※ 川崎市と比較すると「モジュール 11. 自分と障害の理解」、「モジュール 18.働く」への関心が高
くなっている

＜ 支援者からみて参加者がプログラム参加後に得た学び ＞
■ 約 4 割以上の回答を得られた項目の該当モジュールは以下の通り
・生活の基礎をつくる（モジュール 1.健康管理、モジュール 3.セルフケア、モジュール 4.時間管理）
・自分らしく生きる（モジュール 11.自分と障害の理解、12.コミュニケーションと人間関係）
・社会参加する（モジュール 18.働く）
■ 当日は、体調管理・身だしなみ・時間管理などの「生活の基礎をつくる」部分、自信を持つ・コミュニケーションなどの「自分らしく生きる」部分、楽しく働く・態度や姿勢に気をつけるなど「社会参加する」部分における学びがあることがわかった
■ 「生活の基礎をつくる」部分において、参加者アンケートとは異なる結果が見られた
※ 参加者アンケートと比較すると支援者様は「社会性を意識して参加している」という印象を持たれていることが考えられる
※ 川崎市と比較すると「モジュール 11. 自分と障害の理解」、「モジュール 18.働く」への関心が高くなっている

＜プログラム終了後に利用者様と振り返りの場や、感想や想いを共有する場を設けているか＞
■ 毎回設けている方が 5 割
■ 体験中に共有している方が 3 割いることから、プログラムを通じて利用者様とコミュニケーションをとる機会になっていることが推測される
※川崎市と比較すると毎回設けている方が 1.5 割↓、体験中に共有している方が 1 割↑

＜ プログラムに参加して利用者様が学んだこと（38 名の自由記述の回答から検証） ＞
■ 社会に出ること、働くこと、チームワーク、協調性、コミュニケーションに関する学びがあった
■ 普段とは違う場所、大勢の人の中で働くことで、事業所では見ることができない利用者様の一面/行動を見ることができたという声があった
■ 支援者様から見ても、働くという経験を通じて多くの人と関わるこのプログラムが、様々な学びを生んでいることがわかる
■ イベントに関わることで「働く」ことだけでなく、「余暇活動の充実」にもポジティブな影響があることが分かった
■ プログラムを通じて得た課題を日頃の支援で活かしたいという声がある

＜プログラムを通じて利用者様が学んだことはこれからの生活に役立つと思うか＞
■ そう思う方が 9 割
■ あまり思わない方が 1 割未満

＜ その他、感想等（29 名の自由回答の記述から検証） ＞

■ 利用者様にも支援員様にも「働く」とは何かを考える機会となっている

■ 支援者様側からはアセスメントの場として有用な機会であることがわかる

■ 支援者様にとっても日頃の支援の工夫を考える機会にもなっている

■ 経験や交流の場としてプログラムが貴重な機会となっている

■ 支援者様だけでなく、利用者様のご家族や地域の方にも存在の周知、社会参加への選択肢を考える機会にもなっている

（事業の実施により中長期的（事業修了後）に得たい成果／アウトカム目標）

※数値を用いる等して具体的に記載すること

＜ プログラム実施目標 ＞

地域数　　：全国１０地域～３０地域

合計企画（日）：１００企画～３００企画

参加者数　　：２００名～６００名以上

参加ボランティア：述べ ２０名以上

＜ アンケート目標 ＞

・社会生活力調査アンケート

実施人数：述べ 500 名以上

＜ メディア露出目標 ＞

露出媒体数：５０メディア以上

媒体換算額：　１億円以上

＜ 成果 ＞

正規就労・アルバイトなどへのステップアップ：２０名～５０名

他地域含めたコーディネーター、指導者の育成：１０名以上

（３）本委託事業実施により得られた成果をどのように活用するのか。またその計画について、具体的に記載すること。

・２０１９年に JOC へ訪問して当プログラムの説明を行い、２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックでは国立競技場ほかで採用される予定であった。しかしながら延期かつ無観客の実施となったため、２０２１年の同大会での実施が実現できなかった。

・２０２５年の大阪万博をメルクマールに、２０３０札幌の冬季オリパラでの実施を目指したい。（全国での就労体験参加者を札幌に集結させる）

※大阪万博についてはすでに経済産業省と打ち合わせを開始している

※札幌については、来年度４月１６日にプログラム実施が決定しており、行政や地元議員も巻き込みながら市内の福祉事業所を中心に実行委員会を立ち上げる予定

・J リーグを起点に B リーグや他の地域スポーツへ、また音楽コンサートなどのエンターテイメントや、より地域に根差した地域イベント（お祭りなど）にも広げていく。

・全国の主体的な福祉事業者や中間支援組織との連携を強化し、コンソーシアムを形成。

・定期的な協議会を開催し、各地の取り組み手法・情報・課題などの共有を行い、
活動のクオリティを担保しながら、随時アップデートしていく。